

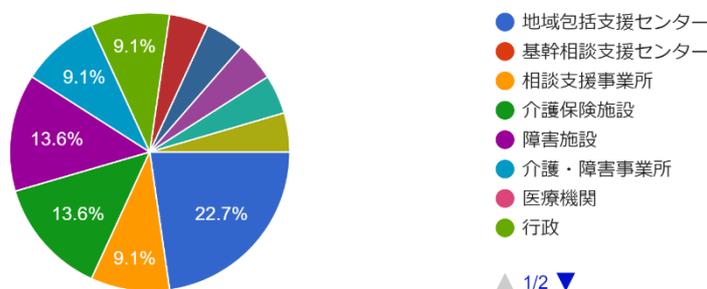
R4 権利擁護セミナー

高齢者・障害者の「あたりまえの生活（権利）」を奪うもの 振り返り

宮城県社会福祉士会地域包括支援委員会
宮城福祉オンブズネット「エール」

業種

22件の回答



①【「あたりまえの生活（権利）」を奪うもの～偏見、ステレオタイプ、管理と支援～】の講義を受けて 感じたこと思ったこと は何ですか

支援が管理にならないためのポイントを日頃から意識したいと思いました。
支援者があたりまえの生活を奪ってしまう原因になる。それを再確認できるお話しでした。

本人が主体であるという意識が低かったと反省しました。また、勉強不足でステレオタイプになっていたのではないかと気づかされました。

自分が行っている支援は管理になっていないか、考えることができました。

自分の思い込みや常識を壊すことの必要性
意思決定支援の注意事項として、やり直すことのできない失敗であれば失敗しても良いという視点を持つ

その人のあたりまえの生活を奪っているのが支援者かも知れないという視点と、偏見を持ち込まずに支援が出来るように、常に考え続けながら仕事をしていきたいと感じました。

偏見・スティグマを克服するために大橋先生が実践されていることを伺えたことや、「支援」が「管理」にならないために取り組める考え方を伺い、自分自身だけでなく、事業所内で共有し実践していきたいと思いました。

<p>自分を振り返ると、いかに自分は、偏見をもって生きているか。わがままだととらえている自分がいることに気づきます。いつもこれでいいのかと、意識して考えていくように努めるしかないと思います。</p>
<p>本人の意思の尊重、自己決定尊重は自分で決めたからいいよね。それでいいのかという言葉が印象に残りました。本人主体、本人主体と言っているのだから、本人が決めたんだってそれでいいでしょうと、私はずっと思っていました。が、そこに利益がつながっていなくてダメなんだとわかりました。判断能力はあったのか、社会からされていないかなども確認が必要ということがわかりました。</p>
<p>認知症があっても障害があっても、その人が思考するなら、その思考を押さえ込んだり捻じ曲げることは権利侵害なのだと感じました</p>
<p>自分の中に存在するスティグマを意識しないと自分が支援の名のもとに日常的上下関係を生み権利を侵害していることを正当化してしまっていることを再認識しました。</p>
<p>こういった内容は何年も何年も繰り返し議論にあがっているかと思いますが、改めて人ってというのは自分と違う立場、自分と違う考え方、自分より出来ない人をさがして区別するのにあらがえないのかと感じました。スティグマとか新しい言葉に置き換わっているだけで、根本的な問題は一つ変わっていない世の中なのかなと。ただ、その中でも自分がやれる事は何かという問いのプラスになったことは確かだと思います。表明、行動の裏には必ず動機がありきちんと教えてもらおうということ、常に新しい情報を調べて根拠だてて物事を考える足しにしていくことは誰でもできる事だと思いますので、常に念頭に置いて日々の業務や生活を送っていきたいと感じました。</p>
<p>本人が本人の意思で決めたのであればそれでいいでしょう。本人主体なのだからと思っ ていましたが、そこに最善の利益が伴わないといけなことを知りました。判断能力があ ったのか、なども考える必要があることも知りました。</p>
<p>大橋弁護士講演を伺うことができた。 権利擁護には「～されない」「～したい」の側面があり、両方が実現できることを理解し た。 また、「自分のことは自分抜きに決めないで」の真の意味についての分析で、「本人が決め ればよい」では放置になりかねない、そのためには決める為の支援が重要と再確認でき た。 偏見やスティグマについても、どう克服できるかも考える機会を持てる時間でした。</p>
<p>今まで行っている支援が管理になっているのではないか。支援という名の支配ではない かなど、当たり前にとらえなくてはならない事がいつの間にか良いと考えつつ弊害にな っていたのかもしれないと、反省させられた。</p>
<p>自分自身の中にある偏見がありありと実感できた。 本人の意思にとことん向き合うこと、まだまだこれからです。 決めつけてしまうと、考えなくて済む、その通りだと感じました。</p>

<p>楽を選ぶ、自分に気がつけたので、その自分と向き合い、立ち止まり考える支援をして行きたいです。</p>
<p>久しぶりにエールの研修会に参加させていただきました。自分が思う思想が偏見になったり、思い込みになったりする面もあると学びました。当たり前の生活を考えると、簡単そうで難しいと思うことがあるけれども、本人抜きで支援を考えている事が多く、その中で方向性はいい方に向かわないことが多いです。意思決定支援の意味を考えて対応する事が必要と考えました。</p>
<p>偏見とは、ステレオタイプとはを改めて勉強しました。そこを理解していくと本人主体でどうしたらいいかを考えていくことにつながると思いました。</p> <p>また、権利擁護の消極的側面と積極的側面があることと意思決定支援、本人を抜きに話し合いはできないことの講義を聞きながら、日常の業務の振り返りしながら講義を受けました。</p>
<p>自分自身がステレオタイプになっていないか、誤った考えになっていないかを確認する事は必要と思った。</p>
<p>日々の業務の中でモヤモヤしていた事が整理して理解できて良かったと思います</p>
<p>あたりまえの生活を奪う要因について、常に考えること、疑うことの大切さを実感しました。『慣れ』に対する意識を持つこと、強さ、弱さ、怖さを、自分でどこまで気づくことができるか、今後の生活で意識していきたいと思えます。偏見やスティグマについては、確かに誰しもが持っているものだと思いますが、目の前にいる利用者に向けてのものであってはならないと思えます。障害者だから、高齢者だからとすべてをそう捉えてしまう支援者がいるときに、どう指導や助言をしていけばいいのか、今自分自身がぶち当たっている壁なので、この講義で受けた内容を参考に話をしてみようと思えます。</p>
<p>「その人は、どうなのか」と個別に見ていくことを大事にしたいと思えました。</p> <p>また、自分の中にある考え方や感じ方についても、良く知っておく必要があると感じました。</p>
<p>あたりまえ＝慣れであり、慣れは強さであり、弱さである。そして怖さである。その通りだと思います。「慣れ」は考える事を止めるため、思考が停止し、自分の頭で考えなくなるという恐ろしい現象につながります。でも、人は考えることを止めたほうが楽であり、それが成功体験になっているため、慣れていることを選択してしまいます。そこが落とし穴になってしまうことに気付かず、慣れに甘んじてしまいがちです。自らも、周囲とも考えること、そして考えることは常に科学的・最新であること、独善的にならないことを意識しやり続けることが大切だと考えさせられました。</p> <p>ステレオタイプに左右されず、今後も支援をしていきたいと感じました。</p>

②【その人の権利から「管理・支援」を振り返り、その人の権利から「支援のあり方」を考える】 についての演習をおこなって、感じたこと思ったことは何ですか

<p>世の中の最新情報を自分から求めること、思考停止しないで考える、その人がどうしたいのか、権利を奪わない支援をしていくための自分の役割は何なのかを意識していきたいと思います。</p>
<p>他者の視点、意見が自分にはないものでありとても参考になった。もう少し時間があって他の人の意見も聞けたら良かったかも。</p>
<p>慣れにならないように、常に考えて支援にあたるよう心がけること。</p>
<p>慣れの怖さや弱さを知る 物事を常に考え、疑い、決めて、進める</p>
<p>その人の人生の一部、特に生活に困難が生じた場面に関わらせて頂いているという点で、その人らしい人生を継続できるためのささやかなお手伝い出来るような立場でいたいと感じました。その人の残りの人生全て背負うくらいの気持ちが無いとだめなのかと思っていましたが、そうすると管理・支配ということになりかねないので、『支援者に全てを変えたり、全能感はない』ということは私も意識したいと思いました。</p>
<p>本人主体に関わる大切さを痛感しました。支援する側の考え方や価値観に合わせるような関わりは支援ではないこと、やってあげている感を無意識に抱きながらの支援になっているために、裏切られたという気持ちも発生することに気づけました。</p>
<p>支援しているという名のもとに、管理している、管理しようとしている自分がいます。演習を通して、心が揺さぶられ反省しきりです。このことについても意識して、やっていくしかないと思います。</p>
<p>バスの来ないバス停の事例は 何がいけないのかと思いました。認知症のが帰宅願望があり、その人をそのような時は、家の周りを歩いてくるということを教わってことがあります。だから、この方法はとてもいいと思いました。しかし当たり前の生活、支援、管理からの味方では、みんながバス停に立ちたいわけではないということと言われて、その方向から考えるんだとわかりました、本人主体ではないということだったのですね、</p>
<p>良かれと思ってしていることでも、そこに本人の意思がなければ価値観の押し付けになってしまうということ</p>
<p>寛容・優しさは上下関係の該当する。一方的支援は管理。お互いを認めることで権利が守られ行使できる。まずは自分の常識・価値を疑い、揺さぶるようにしたいと思いました。</p>
<p>演習の中を書いている内容に違和感を覚える事はあっても、何のどういう所が違和感を感じているのかを自分の中でしっかり整理して人に説明するという作業はやはり必要だと感じました。違和感を感じてもそれがどこの部分なのかあやふやにしてしまう事もあるなど自分自身思うので、疑問に感じたことをそのままにせず自分の意見として整理できるようにしていきたいと感じました。</p>
<p>バスの来ないバス停の事例で、これのどこがおかしいのか、まったくわかりませんでした。以前に帰宅願望の人を無理やり止めるのではなく、施設の周りをぐるっと歩くだけでもいいと聞いたことがあったかです。しかし、ここでは、本人はどう思うだろうかとか、</p>

<p>みんながバス停に立ちたいわけではないという視点を考えるということを見ると本人主体ではないということ学びました。</p>
<p>事例ごとにグループで話合うことができた。支援する人同士の話しあいで、事例のおかしいなと思うところを出し合うことで、自分には気づけなかった見方や考え方があり、学びとなった。</p>
<p>自分が行っている内容を客観的に見れるもうひとりの自分が居なければ権擁護がおろそかになる可能性が高いと感じた。</p>
<p>本人を思って悩みながら支援しているって、良いなと感じました。 一人では気付けないことも、仲間と話し合う事って、楽しいなとも感じました。</p>
<p>支援するという驕りもあると、どこかで勘違いすることもあると思います。支援と一緒に歩くことなんだとも思いました。また、どこかで引いた目を見ていくことで客観的に物事を見ていくことになると思います。</p>
<p>いくつもの事例を考える時間がとても勉強になりました。自分でも知らず知らずのうちに偏見を持ってしまうことがあると気づきました。日頃から偏見、ステレオタイプ、支援者による管理や支配を意識していくことで、何か変ということに気づき、本人のあたりまえの生活とはどのようなものか考えつづけるようにしたいと思います。</p>
<p>できない事があれば、新しい対応を考える、常に情報は最新にして置く事が大切だと感じた。</p>
<p>支援する側の陥りやすい罠が印象的でした。自己満足感で支援を行っていないか、自分を振り返る大切さを改めて感じました。</p>
<p>情報は常に最新に！という事。いまだに「昔はこうだった」「前はこう言われた」と、支援や考え方が古く、“今”を見ない支援者や保護者が多いと感じています。昔のことも時には必要かもしれないが、必ずしもそうではないという事を発信していこうと感じました。演習の時にグループの会話で、私たちが行っている障害者や高齢者の支援って特別な仕事じゃないよね、と話題になりました。特別と思っている人がいるから管理したくなるのかもしれないな…と、話をされていて感じました。そのような職場の環境、雰囲気は自分が少しでもなくしていかなければならないのだと感じています。</p>
<p>誰の立場で考えるのかによって、関わり方が違って来るのだと思いました。まずは、「その人に聞く」ところから始めたいと思います。思考を止めずに、意識して見ていくことを心がけたいです。</p>
<p>ご本人の尊厳や尊重をせずに話を進める、または行動に移してしまう事が、障害者、高齢者、健常者すべての人がそうであるべき「あたりまえの権利」を奪うものになります。我々、支援者であるべき人間が管理者になってしまいがちであるというのが、人からあたりまえの権利を奪ってしまうものであるとも考えられます。 本来「地位」とは、「人が人として成長していき、人をつくる」であるはずのものです。人は「地位」を勘違いし、関係性からつくる人権侵害であるものに変換されてしまうのだ</p>

と感じました。

耳障りの言い台詞で、表現でごまかすのではなく、人対人としての人権を大事にしていこう、自らが、サービスを提供させていただく立場において、利用者にとっての支援者であり続けたいと改めて感じる事が出来ました。